

森林塾通信

発行 KOA 森林塾 (事務局)
0265-70-7065
編集 早川清志
題字 島崎洋路

『何度でも楽しいきのこ栽培』

二年は例年になく暖かい日が続き、そこいらの雪もすっかり融けてしまっていたのですが、三月に入り寒の戻り。そしてこの日朝起きたら白一色、十センチ近く雪が積もっていました。二年連続

天候不順を持ってきたのは昨年も駆けつけてくれた日野市のシイタケ屋さん遠藤さんだったのか？などというつまらない詮索は雪の高速で大渋滞に遭いながらオガ菌持参でご指導しに来て



「穴は木口から5～6センチのところから」とプロの指導



千鳥に穴をあけていく



こちらは地味な木槌組、トントントン



WANTED「にく丸」

今年も例年の、種駒植菌とオガ菌を木口に塗る短木栽培に加え、大方のシイタケ原木栽培農家が行っている、ドリル穴にオガ菌を充填する植菌法を教えてもらいました。オガ菌は種駒に比べ菌の廻りが早いので今秋には収穫ができるかもしれないとのこと。多少の道具と滅菌や封蝋などの手間と慎重さはいるものの、せつかちな方にとっては良い方法かもしれません。短木栽培

秋が楽しみで、今年も今年のお天気がいい秋の日に山に入ってひと汗流して山仕事。帰りに少し原木を持ち帰り、春の初めに楽しい菌打ち。そして今度の秋には待ちどおしい収穫。美味しくいただきたい。きのこと栽培は何度でも楽しむ事ができて実益もたくさん、おすすめのお楽しみですね。ご自宅に植菌した原木を持ち帰った方、うまく管理してシイタケやナメコがよきによき発生したらご一報ください。通信でみんなに自慢してあげます。

さて菌打ちも終わり、終了式。今年度は小栗さん、園田さん、西村さん、茂籠さんの四人の方が全十七回の皆勤賞。お仕事の都合や、もろもろの後ろ髪を断ち切ったご参加。頭の下がる思いで

培のナメコとともに今年のお天気がいい秋の日に山に入ってひと汗流して山仕事。帰りに少し原木を持ち帰り、春の初めに楽しい菌打ち。そして今度の秋には待ちどおしい収穫。美味しくいただきたい。きのこと栽培は何度でも楽しむ事ができて実益もたくさん、おすすめのお楽しみですね。ご自宅に植菌した原木を持ち帰った方、うまく管理してシイタケやナメコがよきによき発生したらご一報ください。通信でみんなに自慢してあげます。

す。さらに多くの方が十二回以上参加の精勤で、本当にありがとうございました。お疲れ様でした。鳥崎先生が講評で言われたように、これがお付き合いの始まりですの、卒業の方も、来年度来ていただける方も、今後ともよろしくお付き合いください。



サクラの木口にベタベタ塗ってサンドイッチにする

通年コース 第十七回

3月6日(土)

きのこ菌打ち

9時 鳥崎先生の山小屋に

集合。小雪がちらついている。まだ三重組などが到着していなかったけれど三十分遅れで開始。日程説明と先生方のあいさつ。引き続ききのこの菌打ちについての説明

10時15分 雪が止み少し暖かくなってきた。種駒による菌打ち。まずはシイタケから。例によつて春に自然発生し、生でも乾しても使える森産業の「にく丸」を百六十本ほ

ど。ドリル組、木槌組、運搬組ローテーションで。飽きてきた頃シイタケが終わる。あれだけ言ったの以後で見たら一列空っぽはじめ、空穴のあるものが数本。教育的指導!! 続いてクリタケ。これは大貫菌曹製なのでビットは8.5ミリに付け替え。おやもとも8.5ミリがついている。そっぴいシイタケのときに誰かが



ピンホールを見逃さない慎重さが決め手



「楽太郎」という名がついているがちょっとコツがいる

ねないが、逆ならまあ何とか押し込める。二十本ほど打って、午前の部終了
12時 昼食
12時50分 また雪が降ってきたので物置小屋で、オカ菌による植菌。まずは遠藤さんが菌と器具一式をもってきてくれたシイタケ。ドリル穴は六十個くらいあけるとのこと。手動

「穴の小さいやつがある」と叫ぶんだが無視されていられなかった。抜け落ちるか、ちるから大は小を兼ねないが、逆ならまあ何とか押し込める。二十本ほど打って、午前の部終了
12時 昼食
12時50分 また雪が降ってきたので物置小屋で、オカ菌による植菌。まずは遠藤さんが菌と器具一式をもってきてくれたシイタケ。ドリル穴は六十個くらいあけるとのこと。手動

の植付器や桶、はさみを熱湯で消毒。そして充填したあとは蛹を溶かして蓋をする。しっぺり塞がったか確認が肝心。一本づつ交代で打ち、一リットルで

八本の原木に植菌することができました。つぎは短木の木口にべたべたオカ菌を塗る方式でナメコ植菌。ナメコやヒラタケは滅菌などにあまり神経を使わなくてもよく、子供と一緒に家族で植菌には最適です。そして一リットルのオカ菌を子糠や鋸粉で数倍に増量できる。三十セットほどの短木サンドイッチが完成した。多くの方が持ち帰りましたが、上手に管理してほだ化できれば、今秋にもナメコの発生が見られます。原木栽培のナメコはピンポン玉くらいになってから収穫するのがおすすです。ナメコおろしやてんぷらに、ああ待ちどおしい。クリタケは一度天日干しにすると風味がぐっと増します



千葉から皆勤、アンビリーバブル!!



皆勤紅一点、一年間盛り上げてくれました



地元の若きボランティアリーダー。信州の山をよろしく



百人一首にも歌われた、美しい故郷の山をよろしく

2時30分 さて最後の最後は終了式。四人の方が皆勤賞。九人の方が皆勤賞。夏から参加(以降皆勤)の小笠原さん始め、小屋まで来ていて仕事で呼び戻されたたりした阿部さんや、途中で少し体調を崩された永井さんなどそれに届かなかった方も無理をして、都合をつけて半分以上に参加してくれた方がほとんどでした。本当にありがとうございました。

参加者/阿部さん、井伊さん、大河内さん、小栗さん、椎名さん、園田さん、滝口さん、武田さん、西村さん、日比野さん、茂籠さん、矢島さん、小笠原さん、斎藤さん、講師/保科先生、島崎先生、特別講師/遠藤さん、スタッフ/坂野、早川

平成十六年度森林塾 通年コース専門コース ただ今募集中です!!

平成十六年度KOA森林塾の通年コース、専門コースが三月から募集を開始いたしました。概要は

通年コース
第一回 4月24日(土) 下殿島区有林において植林、から始まり全十七回の予定で

今年土、日曜日の開講としましたので、お忙しいサラリーマンの方も参加しやすいかなるのでと期待しています。

二年目の方は各回参加でも結構です。参加申し込み書をお送りください。募集締め切り後、参加の詳細をご連絡差し上げます。また、三年目の方はOB登録が可能ですのでご検討ください。
締め切りは4月9日(金)

専門コース
第一回開催 4月16日(金) 18日(日)以降7月、10月に各三日間と1月にオクションとして厳寒期の作業を設定しました。KOA森林塾の各コース卒業の方またはチェーンソーによる伐倒の経験があり、選木のできる方なら参加できます。
締め切りは4月2日(金)

両コースとも募集案内、入塾申込書がHPに掲載されていますのでそちらからの申し込みも可能です。案内、申し込み書必要な方は事務局までご連絡ください。
なお7月末と10月末に三日間の日程で開催される集中コースは詳細の案内が開催四十日前くらいに出来上がります。こちらにも必要な方は事務局までご連絡ください。

リレー通信



「もうやるしかないですね」

小笠原修一

山仕事を始めて一年半くらいたちました。これでメシを喰っていいことと思って一年たちました。まだ喰えるところまでは届かないものの、メドは少しずつ立って来たのかな、ぐらいになっております。

「希望的に過ぎるんじゃないの！」なんて声もあります。そんな外野の声は無視！だって、何かをやる時「思えば半分は到達した。」そう思って人生やって来ましたからメドが立ったということとは、残りの五十パーセントの半分はクリアしたということ、トータルすれば「七十五パーセント以上達成!!」ということになりますから断然無視。ちょっと力んでしまいました。私としては八十パーセントぐらいかなと思っております。

で、今日は残りの二十パーセントのお話。ぐちつぼくなら、上伊那郡飯島町で三十数ヘクタールの団地を造り、町に認定されました。何で団地なんか造ったのかと言いますと、これが補助金の関係なんです。詳しいことなぞ何にも知らずに、(山)矮林を伐つてO.Aヘクタールの植栽をしたところ、県の林務部の担当者(E氏)から私が予定していた補助事業の対象外であることを告げられました。ガツクリしました。別の行政の担当者はOKを出していただだけに、ガツクリだけじゃなく少し腹も立っていません。

「別の補助事業もあるから、それを使えば一銭にもならないなんてことはないですよ。」と言ってくれました。しかしその金額は予定の半分に、不満そうに「ウーン」とうなっている私を見て、E氏は本当にいい人なので、「造るのはかなりキビシイとは思いますが、団地を造ってその中の施業にすれば補助率もアップして当初の予定通りにすることは可能ですよ。団地というのは…」と詳しく説明してくれました。ガゼンやる気になった私は、なんとか団地認定にこぎつけましたが、問題はこれからなんです。

団地を造ると同時に、その林の今後五年間の施業計画を提出しなければなりません。これが時間のかかる作業で、山主の希望、デザイン兼職人としての私の意見、経費のこと等複雑にからみあって結論の出ない山が続けられました。たとえば、立派な松の二段林になってるのに、上層を伐つて材を出しませんか」と持ちかけたところ、そんなことは百も承知の山主のK氏は「言っとることはわかるんだけど、ワシはこの松が大きくなる前に出したんじゃ。当時は松も

値がよつてなあ。そのワシが今度同じ林から松をだすんはどんなもんかなあ。一代で二回も伐つちやいかんに。」と笑っていました。そんな方がいらつしやる一方で「山のことはよくワラン。どうしたもんかな」なんて方もいて、また「ウチの松林は下ばえもないしキレイになつとるから問題はなにいよ。」って方もいる。これは大勢いる。ことほど左様に結論にたどり着くのは大変です。K氏のような方には、自分で計画を出してもらい(元々ある)、それを書類に私が書き込むだけで済むのですが、ボンヤリしたイメージはありながら、五十年、百年先の具体像を描けない山主と面談している中で、私に大きな問題があることに気づきました。それは、私自身、水士保全・景観・材価格・育成及び収穫コスト等がないまぜになっており、混乱していたことでした。

頭を整理するために、針広混交林って本当にありなのか考えてみました。松七割・広葉樹三割、樹齢百年ぐらい、松の樹高は二十メートルから二十五メートル。ヘクタール四百本(広葉樹含む)として百平方メートルに四本。そのうちの一本は広葉樹。



あれだけの山仕事が一銭にもならないのか、と思っていたところE氏は優しい人で

縦三列・横三列、合計九つ

の正方形を書いてみて下さい。各正方形には四本の木が生立っています。その中心の正方形のどれかの松を伐倒するとすると、となりの正方形だけでなく、もう一つの正方形まで倒れ掛かっ

ていきます。松同士なら少々のかかり木でも、強力ウインチで引き倒すことは可能(かなり大変)ですが、広葉樹にかかってしまったらアウトです。松の株元に近いあたり

にワイヤーをセットして、滑車を何度も架け替えながら上げたり引いたりしてやると引き倒すことになるのです。手間は三倍どころの騒ぎではありません。いきおい、コストもアップします。

かつて、混交林は存在していたでしょうし、経済的にもそれは運営は可能だったのだでしょう。しかしし人件費は三倍以上になり、材価格は三分の一という現状では混交林の高コスト体質は致命的だと思われま

今夜はこのくらいで、明朝から赤松の搬出です。健康第一、皆様もそうあられますように。

Yahoo.co.jp

nizunara usagi@

リレー通信

手前勝手な見聞録

～南洋編～

矢島 聡



よくイルカと人間が一緒に泳いでいる映像があるが、あれは果たして野生のイルカなのであろうか。少なくとも私が去年の十一月

かつて日本統治領「南洋諸島」と呼ばれていた島々で、イルカを「半野生状態」で飼育・研究・観光の用としている人達から聞き及んだ話からすれば、それは難しい事のように思える。本来、イルカは基本的に「自由人」であり、彼らが人間と泳ぐという事は、彼らに比して遥かに拙い泳ぎ方しか出来ない我々に「付き合う」程度に遊んでくれるのみであり、飽きれば即何処かへ去って

しまつ事だろう。しかし彼らは同時に大変賢い生き物であり、ある程度の訓練を施せば、一定時間、人間に付き合っ泳いでくれる。更に人を背に乗せるイルカも、この世には在るようだが、あれは曲芸の類である。私の行った施設はイルカのみならずその施設自体が極めて自然状態に近かった。かつて南洋庁の置かれていた首都コロロから舟で十数分、美しい無人島群ロックアイランドの北端に、それは在る。

出て行ってしまうという(因みに、勝手に出て行く癖に、施設に戻って来る時は、入口から「入れてくれ」と騒ぐという...何という素直さである)

当然の事ながら、イルカと泳ぐ前に、イルカと触れ合う上でのルール、その生態、生物学的特徴などのレクチャーを受ける。此処にいるのはバンドウイルカ。イルカの中では小さい種類らしいが、体重は二百キログラムを越し、人間より全然デカい。しかし、不思議とイルカという生き物は威圧感があり

ないと思過ごす程、小さな穴。哺乳類なので当然臍があり、胸ビレは人間の手と同じ5本の骨で出来ている。エサは冷凍の魚を一日に二万カロリー位食すという...なんという大食漢である。メスの方が皮下脂肪が多く、オスの皮膚は歴戦の証として傷が多く残る。大きな傷に黴菌が入ると一生残ってしまう...そのツルツルした体は、予想以上にデリケートなようだ。

閑話休題、勢い、イルカの体の話ばかりになってしまった。施設の最奥にはエメラルドグリーン

げな目：若干、悲しげな目：子供のよう

では雪が少なく、雪かきもほとんどせずすみませした。解け出した雪の合間から花を咲かせる福寿草の輝くばかりの黄色が、春の予感を確かなものにします。山で春一番に咲く花はマンサクで、今が調度その時期です。もう少し暖かくなるとダンコウバイ、アブラチャンと続き、ふきのとうも顔をのぞかせることでしょう。

此処「ドルフィンズ・パシフィック」は、島の所有権を持つ酋長の一人から「仮に数年後に施設がなくなつたとしても、元の自然のままであるように」との条件で貸与された敷地(というより、島々と海面)の上に作られている。全ての通路は島の岸壁に穿った金具にロープを繋いで係留された浮き桟橋、固定されているのは幾つかの石杭と二棟の主な建物(下部

握出来るという優れ物である)。人間の可聴範囲である彼らの鳴き声は、頭頂にある鼻から出し、ここで息継ぎもして、なかなか器用な生き物である。目は優しげ

...緑と岩の島々：此処にいる自分。イルカに「呼ばれた」インスピレーションに端を発する、今回の旅路。私は一日此処に滞在して、午前と午後の二回、イルカと泳いだ。イルカと泳ぐと、疲れも水に対する恐怖も無くなる。彼らの泳ぎの自在さを水中で見ているだけで勉強になる...というより、体で覚えられ

午後

「嘘子」

木杭)...イルカたちは此れらと網によつて区切られた大きな空間に住んでいる。あまり飼育されていない、という感じがしない。しかもなんと彼らの内、好奇心の強い何頭かは網を飛び越えて外海に

休憩時間

この冬は例年に比べ南信

「おわりに」

「おわりに」



を飛び越えて外海に

目を

この冬は例年に比べ南信

「おわりに」

「おわりに」

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。

TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994



E-mail:
ki-hayakawa@koanet.co.jp
sh-sakano@koanet.co.jp
携帯:090-4463-0062(開催日)
URL http://www.koanet.co.jp